

2012年度 修士論文

オリンピック金メダリストが
スター選手になった際の報道環境

From Gold Medalist to Superstar,
The Role of the Media in Covering
Olympic Athletes

早稲田大学大学院スポーツ科学研究科
トップスポーツマネジメントコース

5012A303-8

大橋 未歩

Miho Oohashi

研究指導教員：平田竹男 教授

目次

第1章	序章	4
第1節	背景	4
第1項	オリンピックにおけるメディアの役割と制約	4
第2項	問題意識	7
第2節	先行研究	8
第3節	目的	9
第2章	研究手法1	9
第1節	ラテ欄分析	9
第1項	調査対象	10
第2項	調査期間	10
第3項	調査内容	11
第2節	記事、インタビュー分析	11
第3章	研究手法2	11
第1節	アンケート調査	11
第1項	調査対象者	11
第2項	調査手続き	12
第3項	調査項目	12
第2節	A,B群に対する印象と好きな理由調査	13
第3節	ロンドンオリンピック出場者における偉業と人気の統計的分析	13
第1項	データ処理方法	13
第4章	研究結果1	15
第1節	ラテ欄分析結果	15
第1項	アテネ五輪(2004年8月13日～8月29日)	15
第2項	北京五輪(2008年8月8日～8月24日)	17
第3項	ロンドン五輪(2012年7月27日～8月12日)	17
第2節	記事分析結果	18
第1項	北島康介のケース	18
第2項	野村忠宏と谷亮子のケース	21
第3項	吉田沙保里と伊調馨のケース	22
第4項	松本薫のケース	24
第5章	研究結果2	24
第1節	一番好きな選手ランキングと偉業ランキングについて	24
第2節	A群とB群の分類について	25
第3節	A群B群間に存在する差異に関する「好きな理由」の統計的分析	26
第6章	考察	31
第1節	「言葉」と「ストーリー性」の重要性	31
第2節	同日開催種目時における放送時間の「枠」と「タイミング」への意識の重要性	32
第3節	家族愛、夫婦愛、恩師との関係というテーマでの報道	32
	親近感のある選手への共感	33
第4節		33

第7章	総合考察.....	33
第8章	結論.....	34
第9章	参考文献.....	36
第10章	謝辞.....	37

図 1	テレビ報道時間量の推移 (2005-2008)	4
図 2	競泳シンクロ報道量の推移 (2005-2008 北京五輪)	5
図 3	柔道報道量の推移 (2005-2008 北京五輪)	5
図 4	ラテ欄登場回数日別推移 (アテネ五輪)	16
図 5	ラテ欄登場回数日別推移 (北京五輪)	17
図 6	ラテ欄登場回数日別推移 (ロンドン五輪)	18
図 7	吉田沙保里選手、月別 TV 出演時間.....	23
表 1	2008 年視聴率ランキングトップ 30	6
表 1	調査エリア内推定自家用テレビ所用世帯.....	6
表 3	過去 3 大会の日本の夏季五輪メダル数.....	7
表 4	CM 出演件数.....	8
表 5	配点方法.....	13
表 2	5 因子の定義.....	14
表 7	ラテ欄登場回数 (アテネ五輪)	16
表 8	ラテ欄登場回数 (北京五輪)	17
表 9	北島康介選手レース記録一覧	19
表 10	野村忠宏と谷亮子の戦績と紙面登場数の比較.....	21
表 11	2004 年 8 月 14 日のスケジュール (アテネ五輪)	21
表 12	吉田沙保里選手の戦績と紙面登場数.....	22
表 13	2012 年 12 月 TV 出演ランキング.....	23
表 3	伊調姉妹の戦績と紙面登場数の比較.....	23
表 15	好きな選手ランキングと偉業ランク	25

第1章 序章

第1節 背景

第1項 オリンピックにおけるメディアの役割と制約

オリンピックとはアマチュアスポーツ最大の国際競技大会である。夏季五輪と冬季五輪が4年に一度、2年ごとに交互に行われ、2012年に開催された夏季五輪であるロンドンオリンピックには、204の国と地域から約11,000人が参加し、26競技302種目が行われた。世界の約50億人が視聴すると言われており、オリンピック期間中は世界中の人々がオリンピックに注目し、それに伴い各アマチュアスポーツの報道量（時間）も格段に増えるのである。

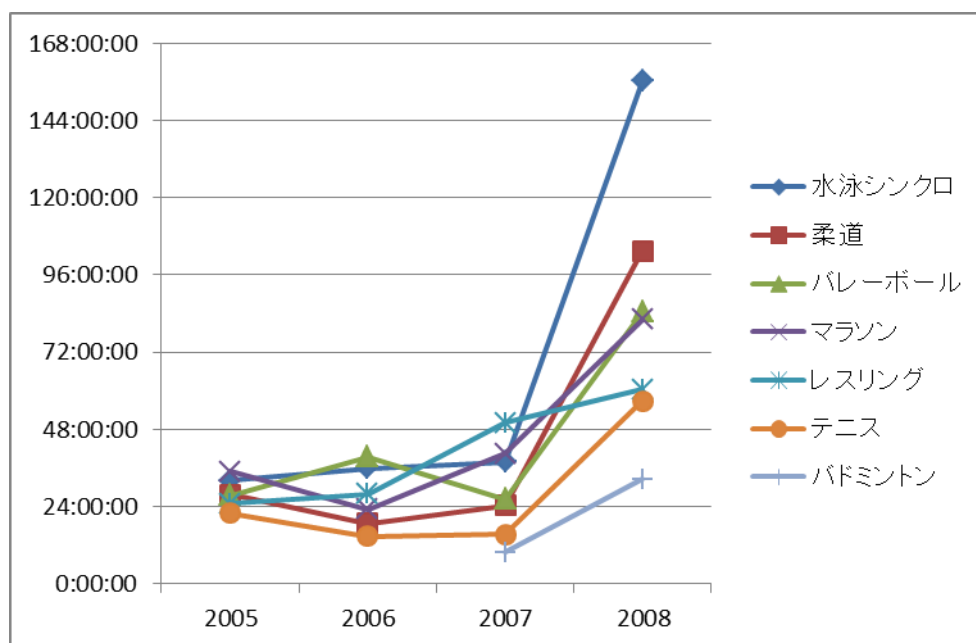


図 1 テレビ報道時間量の推移（2005-2008）

図 1 は、2005 年から、北京五輪が開催された 2008 年までの主な五輪競技の日本でのテレビ報道量（時間）の推移を記したものである。（テニスとバドミントンについては 2005, 2006 年の詳細データを入手できなかったため、2007, 2008 年のデータのみを使用している）

すべての種目において報道量（時間）が増加しており、中でも水泳シンクロと柔道は北京五輪の前年に比べ約 4 倍に、バレーボールやテニス、バドミントンは約 3 倍も報道量が増加していることがわかる。

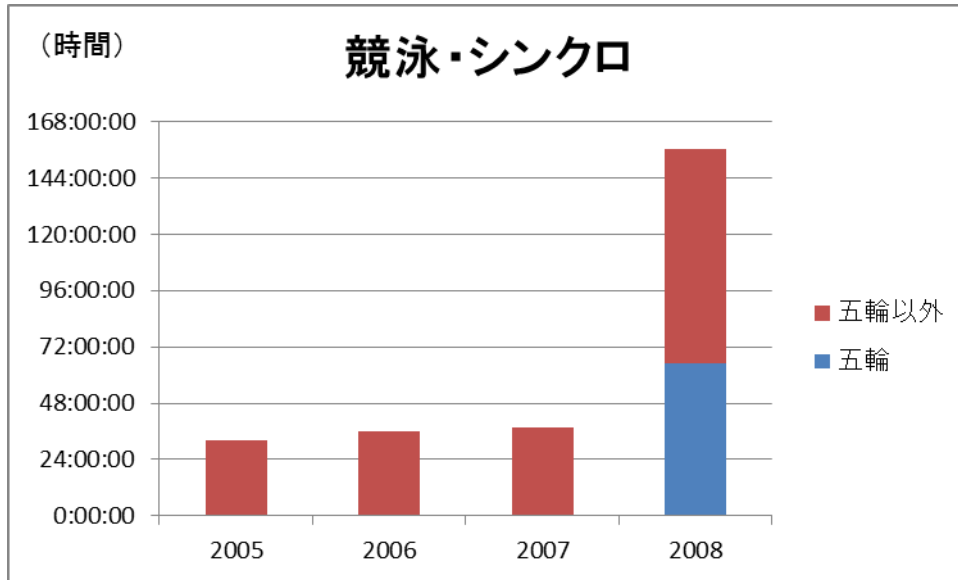


図 2 競泳シンクロ報道量の推移 (2005-2008 北京五輪)

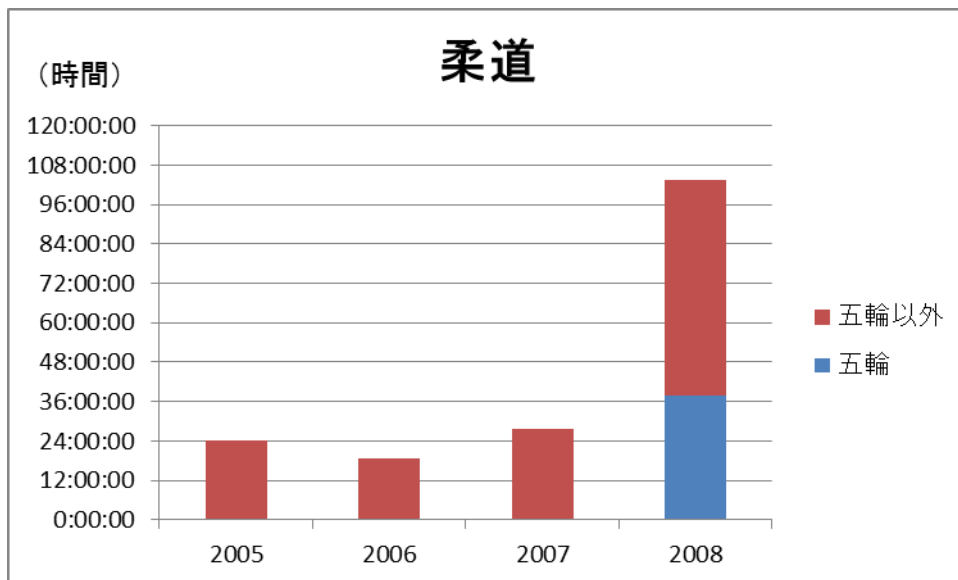


図 3 柔道報道量の推移 (2005-2008 北京五輪)

図 2 と 3 は競泳とシンクロ、柔道における 2005 年から 2 北京五輪開催年である 2008 年までの間の報道時間を表したものである。前年の 4 倍も報道量 (時間) が増加した水泳シンクロと柔道は、北京五輪が開催された 2008 年 8 月だけで過去 3 年間の年間報道量を超えており、オリンピック開催期間における報道量 (時間) がいかに多いかが見て取れる。

表 1 は 2008 年における視聴率ランキング上位 30 を表したものであるが、年間 2 位には北京オリンピックの開会式がランクインし、30 番組中 8 つのオリンピック関連番組がランクインされていることから、報道量の増加だけでなく視聴率においても、オリンピックがもたらす効果が大きいことがわかり、オリンピックの人気度の高さが伺える。

表 4 2008 年視聴率ランキングトップ 30

	番組名	番組平均世帯視聴率 (%)
1	第59回NHK紅白歌合戦	42.1
2	北京オリンピック・開会式	37.3
3	第59回NHK紅白歌合戦	35.7
4	北京オリンピック	30.6
5	24時間テレビ31愛は地球を救うPART10	30.2
6	篤姫	29.2
7	2008プロ野球日本シリーズ・巨人×西武・第7戦	28.2
8	北京オリンピック2008	28.1
9	第84回東京箱根間往復大学駅伝競走復路・2部	27.7
10	CHANGE・最終回	27.4
11	北京オリンピック	27
12	開局55年記念番組ごくせん	26.4
12	開局55年記念番組行列のできる法律相談所プレゼント100枚の絵でカンボジアに学校を	26.4
14	プロボクシングWBC世界フライ級タイトルマッチ・内藤大助×ボンサクレック	26.3
15	北京オリンピック	26
16	24時間テレビ31愛は地球を救うPART9	25.8
17	2008名古屋国際女子マラソン	25.7
17	ゆく年くる年	25.7
19	24時間テレビドラマスペシャル・みゆうの足・あんだよ・パパにあげる	25.6
19	ボクシングWBC世界フライ級タイトルマッチ・内藤大助×山口真吾	25.6
21	第84回東京箱根間往復大学駅伝競走往路・2部	25.4
21	北京オリンピック	25.4
23	北京オリンピック・閉会式	25.1
24	北京オリンピック	24.9
25	ボクシング世界フライ級ダブルタイトルマッチ・内藤大助×清水智信坂田健史×久高寛之	24.7
25	開局50周年記念特別番組フィギュアスケートグランプリファイナル世界一決定戦2008	24.7
27	大相撲初場所・千秋楽	24.4
28	世界フィギュアスケート選手権2008・女子フリー	24.3
28	NHKニュース7	24.3
30	はねるのトビら	24.1

表 5 調査エリア内推定自家用テレビ所用世帯
ビデオリサーチホームページより筆者作成 (2012年10月1日現在)

	総世帯数	1%あたり()人
関東地区	18,009,000	180,090
関西地区	7,048,000	70,480
名古屋地区	3,770,000	37,700

関東地方の世帯視聴率1%は約18万世帯であり、五輪各番組は平均約500万世帯が視聴

していると想定され、アマチュアスポーツにおけるオリンピック報道が大きなウエイトを占めていることがわかる。その背景には、日本のオリンピック報道体制も関連していると考えられる。日本では、NHK、日本テレビ、テレビ朝日、TBS、テレビ東京、フジテレビの全6キー局が種目を割り振り、全局で連日報道しているため、テレビでどのチャンネルを点けても、オリンピック関連番組が放映されるようになっており、オリンピックの影響力は相乗効果で高まっていく背景があると。しかし、その一方で、6局によるオリンピック放送から、熾烈な視聴率競争も存在しているというのも事実である。

第2項 問題意識

筆者は2002年にテレビ東京にアナウンサーとして入社し、スポーツニュース番組を担当してきた。その間、幸運にも2004年アテネ五輪、2008年北京五輪、2012年ロンドン五輪と3度にわたり現地に赴き五輪を取材、試合会場における選手インタビューや、生中継におけるスタジオキャスターを経験した。

表 6 過去3大会の日本の夏季五輪メダル数
JOC ホームページより作成

	金	銀	銅	合計
第28回(2004年)アテネ大会	16	9	12	37
第29回(2008年)北京大会	9	6	10	25
第30回(2012年)ロンドン大会	7	14	17	38

3大会の日本選手の競技結果としては、アテネ五輪では史上最多16個の金メダル、北京五輪では連覇を成し遂げた選手が6人、ロンドン五輪では史上最多のメダリストが誕生し、日本人選手が華々しく活躍した3大会であったと言える。しかし、この3大会のオリンピック報道に携わる中で、違和感を感じるがあった。それは加熱する視聴率競争の裏で、競技結果とその後の知名度との間に差異が生じる選手がいたことである。勝敗や記録という客観的な競技結果が出るスポーツ選手は、競技結果に則した市場評価を受けるべきであるが、必ずしも全員がそうではないメディアの報道手法が何らかの影響を与えているのではないかという問題意識を持つに至った。

その後の知名度に差異が生じている指標の一つとしてCM出演件数がある。以下の表はアテネオリンピック、北京オリンピック、ロンドンオリンピックの金メダル獲得者とテレビCM出演件数を表したものである。アテネ、北京オリンピックにおいて金メダルを獲得した競泳の北島康介がテレビCM出演件数15件で1位、次いで柔道の谷亮子、陸上ハンマー投げの室伏広治が10社で3位である。4位には女子レスリングでアテネ、北京、ロンドンオリンピックと3大会連続で金メダルを獲得した吉田沙保里がランクインし、5位には北京オリンピックにおいて金メダルを獲得した男子体操の富田洋之、北京オリンピック女子ソフトボールにおいて金メダルを獲得した上野由岐子が4社でランクインした。

また、対象全選手におけるテレビCM出演件数の平均値は2.86社であり、平均値以上の選手が北島康介、谷亮子、室伏広治、吉田沙保里、富田洋之、上野由岐子、伊調馨、内村航平の8選手、平均値以下の選手が柴田亜衣、塚田真希、鈴木桂治、野口みずき、野村忠宏、内柴正人、谷本歩実、上野雅恵、阿武教子、石井慧、松本薫、村田諒太、米満達弘、小原日登美の14選手に分類される。

同じ金メダリストであっても北島康介のように15件のCMに出演する選手と1件も出演することのない選手が生じる理由にはメディアの報道手法が影響しているのではないだろうか。

表 7 CM 出演件数

金メダル獲得者	テレビCM出演件数
北島康介	15
谷亮子	12
室伏広治	10
吉田沙保里	7
富田洋之	4
上野由岐子	4
伊調馨	3
内村航平	3
柴田亜衣	2
塚田真希	1
鈴木桂治	1
野口みずき	1
野村忠宏	0
内柴正人	0
谷本歩実	0
上野雅恵	0
阿武教子	0
石井慧	0
松本薫	0
村田諒太	0
米満達弘	0
小原日登美	0
平均	2.863636364

第2節 先行研究

・スター選手の定義について

スター選手の定義についてはこれまでも数多くの研究が行われてきた。Smith. G (1973) は"The Sports Hero : An Endangered Species."の中で「スポーツヒーローは際立った身体能力を持ち、その卓越性を毎年維持し、逆境を乗り越え、独特の才能やカリスマ性を示す。」と述べており、スターの要素として「成績」や「継続性」「物語」、「才能」、「カリスマ性」といった項目を挙げている。

また、メディア側から見たスターとしては、鈴木(2000)が「スポーツ文化の現在(道和書院)」の中で「現代では、古典的な意味合いでのヒーローとはまったく違うヒーローが生産され始めている」、「メディアへの露出度が高いほどヒーロー（スター）に近づく道ができた」というようにスター選手とはメディアへ露出することが重要なポイントとなっていることを述べている。

スポーツにおけるヒーローモデルについては橋本(2002)が「現代メディアスポーツ論」の中で、「真面目」、「純粹」、「単体」といった近代(モダン)の価値を体現したスター選手を「モダンスポーツヒーロー」として力道山や長嶋茂雄などを挙げている。また、「莫大な報酬」、「華麗」、「個性的」、「名声」、「贅沢」といった特徴を持つスター選手を「ポストモダンスポーツヒーロー」として中田英寿を挙げている。

上記に述べた「成績」や「物語（ストーリー）」の観点では、高橋利枝ら、(2006)が「グローバル・メディア・イベントとしてのスポーツ」の中で「様々な国内・国際試合に勝利し、ワールドカップ出場やオリンピックでのメダル獲得などによって、トップアスリートとしての地位を築く.」、「社会や世間から認められ、スターとなった.」ということ述べており、競技成績がスターに必要な要件の1つであるとしている。また、鬼丸正明(2006)は、「スポーツ・映像・社会」の中で「アスリートの生い立ち」、「競技におけるライバルの存在」がスター選手に導く要素であるとし、「現実のスポーツ中継は、スター選手を中心に様々な「物語」を生産・流通させている.」と述べている。

・スポーツメディアがオーディエンスにもたらす意識

深沢(2009)は、スポーツの「物語」はオーディエンスにどのような意識を生じさせるのかについて研究し、まずメディアが提供する「物語」が視聴者の意識にもたらす作用について、フィスクとハートレ(1978=1991)は、テレビ視聴とは、外部で起きる出来事を「自然化」するものであり、連続ドラマやソープ・オペラ、ホームコメディからニュースにいたるまで、これらの番組が補強し繰り返すのは同一の意味であるとしている。同一の意味とは、社会全般に共有されている価値観のことであり、メディアが供給する「物語」はその価値観を補強し再生産する働きを持っている。つまり、メディアとは「権力装置」「文化装置」と位置づけられ、私たちのリアリティを構築し個人のアイデンティティにも影響を及ぼしているとも言える。「物語」とは人々の意識や共同体が共有している価値観に支えられているのであり、オーディエンスに「教訓」「喜び」「恐怖」「憐れみ」といった人生訓や感情をもたらす(藤田 2006)と述べている。

上記のようにスターの定義やスポーツメディアが聴衆に与える影響について考察した論文は数多く存在しているものの、実際に過去のスポーツイベントを対象に、その前後期間に報道量や報道内容を分析しスター選手に変貌を遂げるための報道条件について考察した論文は見当たらないのが現状である。

第3節 目的

勝敗や記録という客観的な競技結果が出るスポーツ選手は、競技結果に則した市場評価を受けるべきであるが、必ずしも全員がそうではない現状が存在しているのは上述の通りである。そのような差異が生じる要因を過去のオリンピック大会から明らかにするのはスポーツ界にとっても、報道側にとっても、また観戦する視聴者側にとっても意義のあるものと考えられる。

そこで本研究では本来スターになってしかるべきオリンピック金メダリストがスター選手になるための報道内容と手法を明らかにすることを目的として論を進める。

第2章 研究手法 1

第1節 ラテ欄分析

新聞に掲載されている番組表は、「ラジオ・テレビ欄」を略し、ラテ欄と呼ばれている。

(2) 北京五輪

2008年8月4日～28日

(3) ロンドン五輪

2012年8月23日～9月20日

オリンピック期間中の選手の競技日程がそれぞれ異なるため、公平を期すために開幕約1週間前～閉幕約1週間後まで調査期間を拡大した。

第3項 調査内容

各オリンピック大会において、ラテ欄に名前が登場する選手の回数をカウントし、選手報道量の推移の調査を行なった。3大会の五輪開幕約1週間前～閉幕約1週間後までを調査期間とし、該当日の読売新聞の朝刊を、調査対象ラテ欄として調査した。各大会期間に放送された「オリンピック前半戦総集編」と「オリンピック総集編」を除き、選手の名前だけでなく該当する愛称(例:ヤワラちゃん)や総称(例:レスリング4人娘)も名前と同様にカウントし、金メダリストの各大会における報道量の推移と格差を分析した。そして報道量の多い選手と少ない選手を明らかにした。

第2節 記事、インタビュー分析

続いて記事分析では、第1節で行なったラテ欄記事の中で報道量が他に比べて多い選手や同種目で差異が生じている選手など特徴的選手を抽出し、ラテ欄にどのように記載されているのかを調査した。また、ラテ欄記事以外のオリンピックにおけるインタビュー内容や記事などの調査を行ない、3大会を通じた報道の変遷を調査した。

第3章 研究手法2

上述の通り、スポーツ選手の成績は必ずしもその選手の人気や、メディア価値に直結していると言えない現状が存在する。そこで本章ではオリンピック金メダル獲得者を対象に、大会後のメディア露出について調査をし、結果を出した選手でメディアに取り上げられる選手と、取り上げられない選手における差異について分析を行う。

第1節 アンケート調査

本節では第1節の人気度調査によってA群、B群に抽出された選手において、どのような差異が存在するのかを分析するために、早稲田大学の学生を対象にオリンピック出場選手に対して思い浮かぶ印象や、好きな選手とその理由等のアンケートを行なった。

第1項 調査対象者

調査対象者は、20代前半男女の代表として早稲田大学オープン教育センターならびにスポーツ科学部が開講している「トップスポーツビジネスの最前線」の2012年度の受講生702人を対象とした。現在最もテレビ離れが進んでいると言われる世代であり、テレビ報道

によるバイアスが最もかかっていないと考えられる視聴者層を選択した。

第2項 調査手続き

2012年10月30日から11月7日までWEB上でアンケート調査を行った。当該科目のCourseN@vi上に調査紙(ワード)ファイルを掲示し、対象者は当該ファイルをダウンロードして調査紙に記載してアップロードして回答し、480人の有効回答を得た。

第3項 調査項目

調査項目は以下のとおりである。

1)プロ・アマ、現役・引退、国内・国外を問わず、あなたが好きなスポーツ選手を1人だけ、何の選手かもあわせてあげてください。

2)ロンドンオリンピックでの活躍が印象に残っている選手を1人だけ教えてください。

3)2004年のアテネ五輪を思い出してください。以下に、アテネオリンピックに出場した主な選手を挙げています。名前を見て思い浮かんだことを何でもいいので書いてください。無ければ書かなくて結構です。(なお、現在五輪競技から外れているものは省略しています)井上康生、谷亮子、野村忠宏、横沢由貴、内柴正人、谷本歩実、上野雅恵、泉浩、阿武教子、塚田真希、鈴木桂治、北島康介、森田智己、奥村幸大、山本貴司、中西悠子、柴田亜衣、中村礼子、山本博、伏見俊昭、長塚智広、井上昌己、関一人、轟賢二郎、野口みずき、室伏広治、吉田沙保里、伊調馨、伊調千春、浜口京子、富田洋之、米田功、鹿島丈博、塚原直也、中野大輔、水鳥寿思、武田美保、巽樹理、原田早穂、鈴木絵美子、藤丸真世、米田容子、川嶋奈緒子、田南部力、井上謙二、末續慎吾、朝原宣治、為末大、沢野大地、福士佳代子、弘山晴美

4)ロンドン五輪を思い出してください。以下にロンドン五輪に出場した主な選手を挙げています。

名前を見て思い浮かんだことを何でもいいので書いてください。

無ければ書かなくて結構です。(なお、現在五輪競技から外れているものは省略しています)福元美穂、海堀あゆみ、近賀ゆかり、矢野喬子、岩清水梓、鮫島彩、熊谷紗希、沢穂希、大儀見優季、田中明日菜、安藤梢、丸山桂里奈、大野忍、宮間あや、川澄奈穂美、阪口夢穂、松本薫、福見友子、中村美里、穴井隆将、上野順恵、杉本美香、海老沼匡、西山将士、内村航平、小原日登美、伊調馨、吉田沙保里、村田諒太、米満達弘、福原愛、石川佳純、平野早矢香、太田雄貴、千田健太、三宅諒、淡路卓、藤井瑞希、垣岩令佳、古川高晴、中矢力、田中和仁、山室光史、田中佑典、加藤凌平、平岡拓晃、三宅宏実、清水聡、湯元進一、松本隆太郎、鈴木聡美、寺川綾、加藤ゆか、上田春佳、立石諒、星奈津美、松田丈志、入江陵介、藤井拓郎、北島康介、萩野公介、川中香緒里、蟹江美貴、早川漣、竹下佳江、中道瞳、大友愛、井上香織、荒木絵里香、山口舞、木村沙織、迫田さおり、狩野舞子、江畑幸子、新鍋理沙

5)上記のアテネ、ロンドンに出場した選手で好きな選手を、最大5人まで選んで、理由も書いてください。

6) 5) で答えた選手の中で一番好きな選手を書いてください。

第2節 A,B群に対する印象と好きな理由調査

アンケート調査項目3)、4) からオリンピック出場選手に対して思い浮かぶ内容を抽出し、同類、同義の言葉のカウントを行う。その後、選手毎の「思い浮かぶ言葉」ランキングを作成し、A群、B群における差異を分析する。

第3節 ロンドンオリンピック出場者における偉業と人気の統計的分析

第1項 データ処理方法

第2節で行なったアンケート調査から一番好きな選手ランキングを作成し上位15位を抽出する。その後、JOC公式ホームページ内のオリンピックメダル・入賞者一覧から、その選手におけるロンドンオリンピックから過去の大会に至るまでの競技成績を点数化し、15選手内におけるランク付けを行う。その際の競技成績と点数化は以下の指標を基に行うものとする。この指標を用いたのは金メダルが1位、銀メダルが2位、銅メダルが3位、そして入賞のランクとしては一番低いランクが8位であり、偉業度と順位の間には反比例の関係性があるとし、1位には8点を配点し、2位には次いで7点、3位には6点、8位には1点を配点する以下の配点方法を用いた。

表8 配点方法

金メダル	8点
銀メダル	7点
銅メダル	6点
4位	5点
5位	4点
6位	3点
7位	2点
8位	1点

次に抽出された15選手において、x軸を偉業ランク、y軸を一番好きな選手ランクとして散布図を作成する。散布図の近似曲線より高い選手と低い選手に分類し、それぞれをA群、B群と定義する。このA群、B群における差異を分析するために2節のアンケート調査内の項目5)をデータ化し、好きな選手の理由を客観的にカテゴリー分けを行い、その数をカウントする。分類方法は先行研究としてBraunstein and Zhang(2005)が提唱したアスリートエンドーサ効果の5因子「競技の専門性」「社会的魅力」「プロとしての信頼性」「好ましいパーソナリティ」「キャラクタースタイル」を用いた。5因子の定義は以下に記す。

(Brunstein and Zhang, 2005)より引用

表 95 因子の定義

競技の専門性	優れた競技スキル
	積極的なプレー
	協調性
	リーダーシップ能力
	目標志向
	キャリアの全盛期
	努力家
社会的魅力	多くのメディアが注目
	広く知られている
	身体的魅力
	競技に適した身体
	社交的
	エネルギッシュ
プロとしての信頼性	責任感がある
	言葉づかい
	知的
	堂々
	ポジティブ
	ライフスタイルに共感
	道徳的
	フレンドリー
	人生の歩み方に共感
	素晴らしいスポーツマンシップ
振る舞いに共感	
好ましいパーソナリティ	思いやりのある
	謙虚
	とてもチャーミング
	ユーモア
	魅力的
	誠実
	きさく
	ファンとのつながりを維持する力
	モラル
	カリスマ性
ファンと過ごす時間を持つ	
キャラクタースタイル	賛否両論ある
	華やかさ
	世界的に活躍

・言葉の定義

「エンドーサ効果」：企業がエンドーサー(endorser)である有名アスリートと肖像権利用や商品化権の独占契約を結び、それが商品販売に反映した場合の効果である。

・分類方法

アンケートから抽出された好きな選手に対する理由を以下の例のように、同様の意味や言葉を持つものを上記の5因子38項目に分類した。

参考例

類い希なゲームメイク能力を持つ世界に誇る選手だから

→優れた競技スキル、世界的に活躍

インタビューのサバサバした感じ

→振る舞いに共感
エースとしてのプレーもさることながらルックスのかわいらしさが魅力
→身体的魅力、優れた競技スキル

コメントがユニーク
→言葉づかい

自分の競技を科学している頭の良さ
→知的

代表を引っ張っている人だと感じるから
→リーダーシップ能力、責任感がある

強くて面白いから
→優れた競技スキル、ユーモア

幼い頃から注目を浴び、批判の声もたくさんあった。それでも必死に努力し、肘を痛めながらも日本のために頑張っている姿は素晴らしいと思う。
→努力家、人生の歩み方に共感

母親思いなところに好感を持ちました
→思いやりのある

周囲に流されない感じや自分の考えをしっかりと言えるイメージがある
→堂々

様々なプレッシャーをはねのけ金メダルを獲得したから
→ポジティブ

さらに、A群、B群の間において、カテゴリー分けされた5因子38項目の中でどの項目に差異が存在するのかを分析するために、SPSS V13.0J for Windows を使用しノンパラメトリック検定である Mann-Whitney 検定を用いて比較分析を行なった。

第4章 研究結果 1

第1節 ラテ欄分析結果

第1項 アテネ五輪（2004年8月13日～8月29日）

2004年に行われたアテネ五輪において、金メダルを獲得した日本人選手のラテ欄登場回数をカウントし、グラフ化した。

表 10 ラテ欄登場回数 (アテネ五輪)

	8月8~13	8/14~19	8/20~25	8/26~31	9/1~6
谷亮子	6	20	1	2	5
野村忠宏	0	5	3	1	0
内柴正人	0	3	1	0	0
北島康介	2	47	7	4	6
体操男子団体	0	33	1	0	1
谷本歩実	0	3	0	0	1
上野雅恵	0	3	1	0	0
阿武教子	0	2	8	0	0
塚田真希	0	0	4	0	0
鈴木桂治	0	0	9	0	0
柴田亜衣	0	2	3	0	1
野口みずき	0	0	12	13	5
吉田沙保里	0	0	9	2	0
伊調馨	0	0	8	2	0
室伏広治	1	0	16	17	0

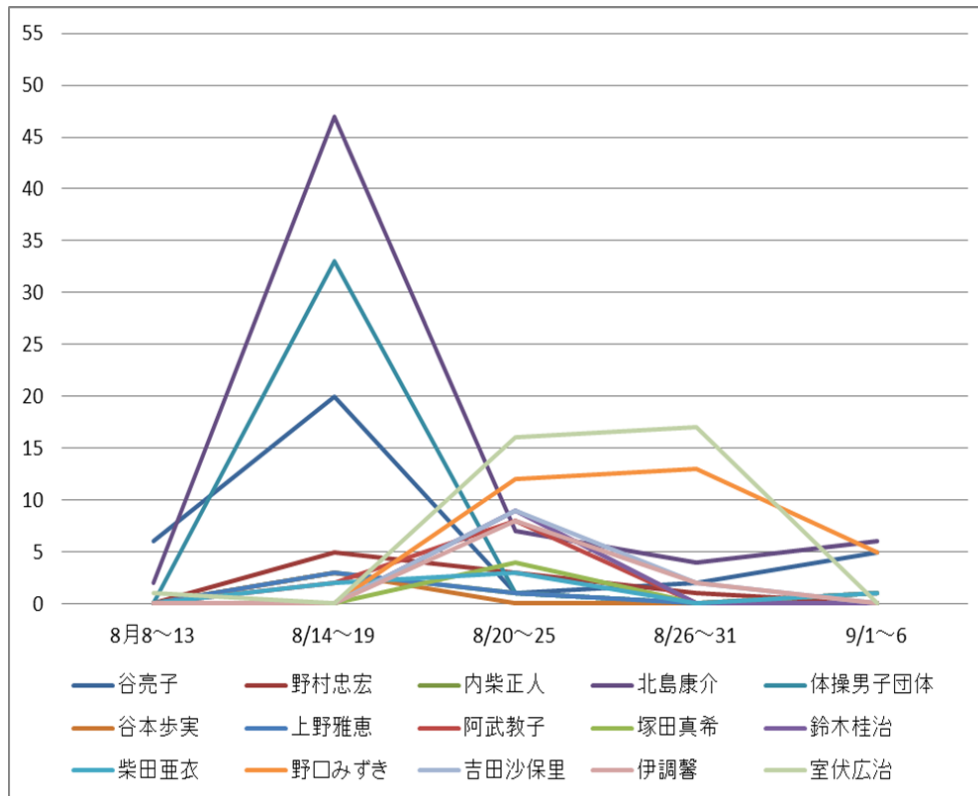


図 4 ラテ欄登場回数日別推移 (アテネ五輪)

五輪前半においては、競泳平泳ぎ100m200mで2冠を達成した北島康介の報道量が突出している。次に28年ぶりに金メダルを獲得した体操男子団体、連覇を達成した柔道

谷亮子と続いている。実績に反して報道量が少ないのは五輪3連覇の野村忠宏である。後半においては、陸上ハンマー投げの室伏広治とマラソン野口みずきの報道量が目立っている。ほとんどの選手が、増加したのとほぼ同じ傾斜角で報道量が減少し山型になるのに対し、室伏広治と野口みずきにおいては、報道量には持続性が見られ台形型になっていることがわかった。

第2項 北京五輪（2008年8月8日～8月24日）

2008年に行われた北京五輪において、金メダルを獲得した日本人選手のラテ欄登場回数をカウントし、グラフ化した。

表 11 ラテ欄登場回数（北京五輪）

	8/4～8	8/9～13	8/14～18	8/19～23	8/24～28
北島康介	3	44	33	5	2
ソフトボール女子	0	1	1	15	6
吉田沙保里	1	0	8	1	0
伊調馨	1	0	12	3	0
谷本歩実	0	13	0	0	0
上野雅恵	0	2	12	0	0
石井慧	0	0	11	0	0
内柴正人	0	12	0	0	0

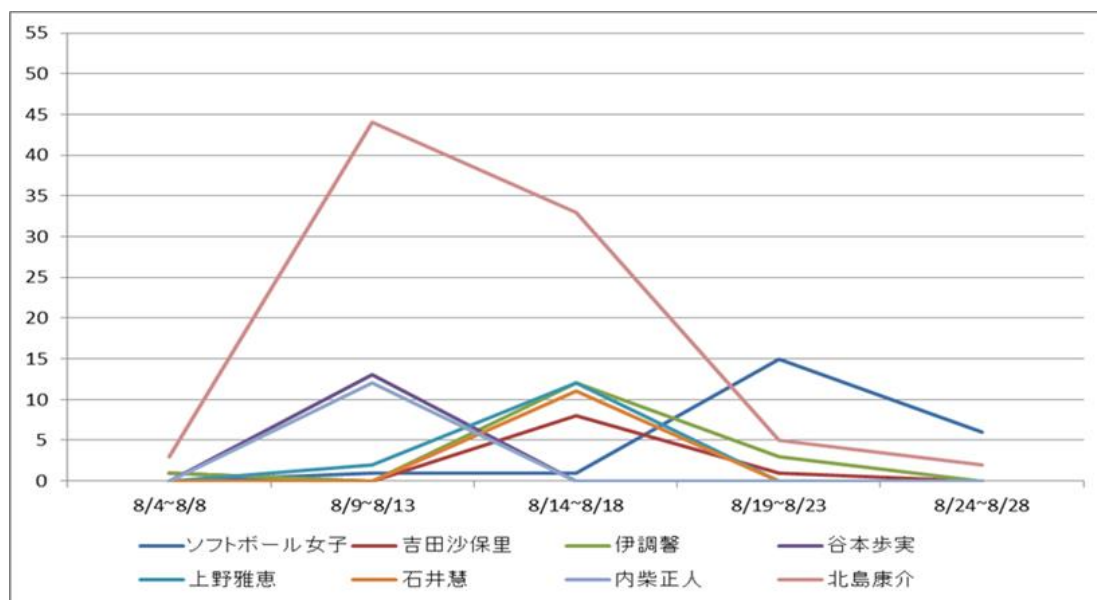


図 5 ラテ欄登場回数日別推移（北京五輪）

アテネ五輪に続き2種目で2冠に輝いた北島康介の報道量が突出しているアテネ五輪においては前半競技の選手は山型で報道量の減少が見られたが北京五輪における北島康介は台形型を形成している。吉田沙保里は実績に反して報道量が低いという結果となった。

第3項 ロンドン五輪（2012年7月27日～8月12日）

2012年に行われたロンドン五輪において、金メダルを獲得した日本人選手のラテ欄登場回数をカウントし、グラフ化した。

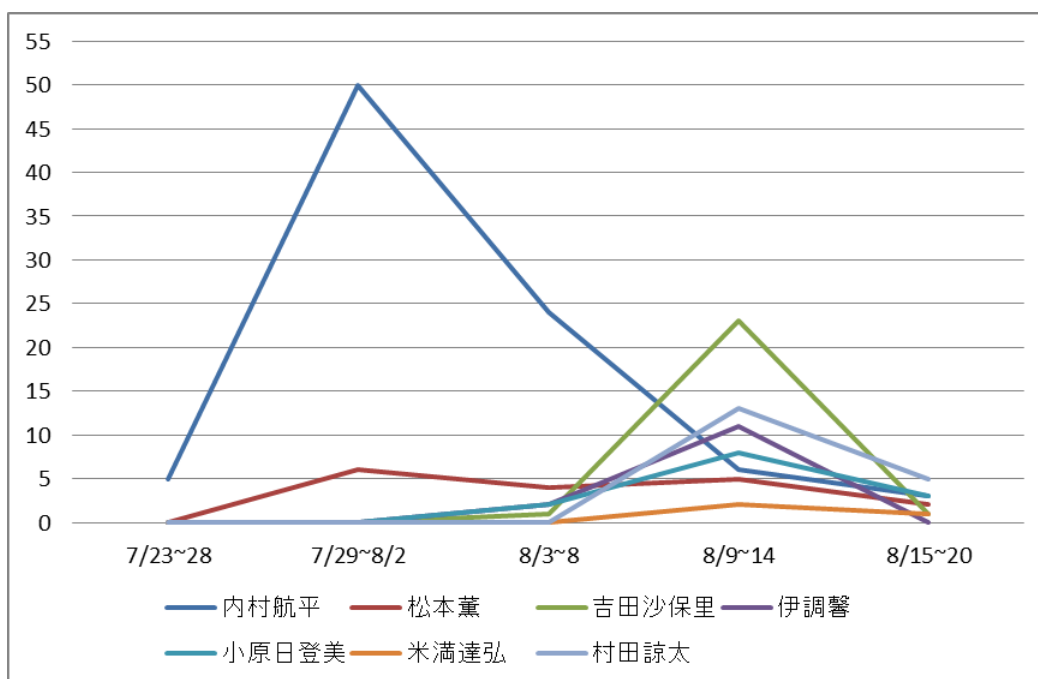


図 6 ラテ欄登場回数日別推移 (ロンドン五輪)

内村航平の報道量が突出している。次に3連覇の吉田沙保里、続いて五輪初出場ながら村田亮太の報道量が多い。伊調馨と吉田沙保里に関しては北京五輪とは逆転現象が起き吉田沙保里が伊調馨のラテ欄登場回数を上回る結果となった。ほとんどの選手が山型を形成するのに対し、松本薫の報道量には持続性が見られた。

第2節 記事分析結果

第1項 北島康介のケース

・アテネ五輪

北島康介はアテネ五輪において報道量が突出している。そこでアテネ五輪に至るまでの過程を振り返る。

北島康介は高校三年でシドニー五輪に出場したが、百メートルで四位、二百メートルは予選落ちした。しかし、アテネ五輪前年の世界選手権を2種目とも世界新記録で優勝しておりオリンピックでも金メダル最有力候補と目され、北島自身も「金メダルをねらう」と公言していた。しかし、アテネ五輪開幕の1ヶ月前、二つの世界新をブレンダン・ハンセン選手(米)に塗り替えられた。十四日の予選で出した五輪新記録も、その八時間後にハンセン選手が上回っており、白熱したライバル争いや、北島の有言実行なるかという話題にも注目が集まっていた。

金メダル後の第一声は「気持ちいい。チョー、気持ちいい」。2004年の流行語大賞を受賞し、今や北島=名言というイメージが定着している。しかし、15日(現地時間)に100mで金メダルを獲得した後、200mでの2冠に向けて各放送局北島特集を組んでいるが、そのラテ欄を見てみると以下のような結果となった。

以下に抜粋する。(19日付けの新聞において)

①北島の2冠達成は②北島 VS ハンセン・平泳ぎ王者をかけた対決③北島康介2冠に挑戦④好調北島二冠達成?⑤北島200メートル世界新で二冠?⑥二個目の金メダルへ北島平泳ぎ200メートル決勝へ⑦アテネ北島2冠挑戦に列島騒然⑧興奮北島がに冠に挑んだ日⑨アテネ速報北島連続金は⑩北島ダブル金の行方⑪北島康介200メートル平でも狙う金⑫

北島・森田に続け山田・柴田・山本・中村・寺川メダルへ挑む⑬水泳北島2冠獲得か⑭北島決戦・夢よ再び⑮二冠へ北島

とあり、ハンセンとのライバル争いには着目していても「チョー、気持ちいい」には一切触れられていない。つまり「チョー、気持ちいい」に関する記述は一切なく、この言葉が「名言」と捉えられたのは実はオリンピック期間中ではないことがわかった。

8月31日付けの読売新聞において『「チョー」は若者言葉の典型で、とかく、非難の対象になりがち。しかし、行き詰まる接戦を制した心情をそのまま吐露した印象も強く、北島選手の「チョー」に眉をひそめる人はいなかったただろう』という寄稿がある。若者言葉である「チョー」が、オリンピックのハイライト映像の中で北島のレース後の清々しい表情とともに繰り返し報道されたからこそ、世間で共有されることになったのではないだろうか。テレビメディアだからこそ「名言」へと変貌を遂げた言葉とも言える。

流行語大賞を受賞した際の北島選手は「自然に出た言葉がこれほど浸透していることにびっくりしています」と笑顔で話した。

・北京五輪

北京五輪においても北島康介の報道量は突出していた。北京五輪においては報道量が台形型を形成しており、ほとんどの選手が山型の報道量を形成するのに対し、特異な結果となった。以下にはアテネ五輪以後から北京五輪に至るまでの過程を振り返っていく。以下は北島康介のレース記録である。

表 12 北島康介選手レース記録一覧

大会名	競技種目	タイム	レース結果
2003年 世界選手権	100m平泳ぎ	59.78	優勝 ※世界新記録
2003年 世界選手権	200m 平泳ぎ	2:09.42	優勝 ※世界新記録
2003年 世界選手権	400m メドレーリレー	3:36.12	3位 ※日本新記録
2004年 アテネオリンピック	100m 平泳ぎ	1:00.08	優勝 ※オリンピック新記録
2004年 アテネオリンピック	200m 平泳ぎ	2:09.44	優勝 ※オリンピック新記録
2004年 アテネオリンピック	400m メドレーリレー	3:35.22	3位 ※日本新記録
2005年 世界選手権	50m 平泳ぎ	27.78	3位 ※日本新記録
2005年 世界選手権	100m 平泳ぎ	59.53	2位 ※日本新記録
2005年 世界選手権	400m メドレーリレー	3:35.40	3位
2006年 パンパシフィック	100m 平泳ぎ	1:00.90	3位
2006年 パンパシフィック	200m 平泳ぎ	2:10.87	2位
2006年 パンパシフィック	400m メドレーリレー	3:35.70	2位
2007年 世界選手権	100m 平泳ぎ	59.96	2位
2007年 世界選手権	200m 平泳ぎ	2:09.80	優勝
2007年 世界選手権	400m メドレーリレー	3:37.04	2位 ※日本新記録
2007年 世界競泳	100m 平泳ぎ	59.74	優勝
2007年 世界競泳	200m 平泳ぎ	2:10.02	優勝
2007年 世界競泳	400m メドレーリレー	3:33.35	優勝 ※日本新記録
2008年 JAPAN OPEN	50m 平泳ぎ	27.65	優勝 ※日本新記録
2008年 JAPAN OPEN	100m 平泳ぎ	59.44	優勝 ※日本新記録
2008年 JAPAN OPEN	200m メドレーリレー	2:07.51	優勝 ※世界新記録
2008年 北京オリンピック	100m 平泳ぎ	58.91	優勝 ※世界新記録
2008年 北京オリンピック	200m 平泳ぎ	2:07.64	優勝 ※オリンピック新記録
2008年 北京オリンピック	400m メドレーリレー	3:31.18	3位 ※日本新記録
2010年 パンパシフィック	100m 平泳ぎ	59.35	優勝
2010年 パンパシフィック	200m 平泳ぎ	2:08.36	優勝 ※今季世界最高記録
2010年 パンパシフィック	400m メドレーリレー	3:33.90	2位
2011年 世界選手権	100m 平泳ぎ	01:00.0	4位
2011年 世界選手権	200m 平泳ぎ	02:08.6	2位
2011年 世界選手権	400m メドレーリレー	03:32.9	4位
2012年 日本選手権	100m 平泳ぎ	58.9	優勝 ※日本新記録
2012年 日本選手権	200m 平泳ぎ	02:08.0	優勝
2012年 ロンドンオリンピック	100m 平泳ぎ	59.79	5位
2012年 ロンドンオリンピック	200m 平泳ぎ	02:08.4	4位
2012年 ロンドンオリンピック	400m メドレーリレー	03:31.3	2位

アテネ五輪後は、2005年から2007年の世界選手権で優勝するまで、無冠であった。また高速水着問題など、順風満帆ではなかった北京五輪までの道のりが余計に見るものを魅了した。また「名言」のイメージが定着した北島が勝って何を話すのかという話題性も報道量に拍車をかけた。以下に、北京五輪 100m 金メダル直後のテレビインタビューを再現する。

(インタビュアー)

2大会連続金メダリスト北島康介選手です。強かったですね～！

(北島康介)

はい・・・・・・有難うございます (タオルで涙を拭いながら)

(インタビュアー)

アテネとはまた違った嬉しさがこみ上げてきているかと思いますが？

(北島康介)

はい嬉しいです (涙で話せなくなる)・・・・・・すみません・・・・・・ 何も言えね！！はあ。。

(インタビュアー)

やっと落ち着いてきましたか？少しは？

(北島康介)

はい、応援してくれた方がたくさんいたんで、本当に金メダルとれて良かったです。はい・・ (再び涙ぐむ)

(インタビュアー)

アテネの時は超気持ちいと気持ちを表現しましたが、今回はどんな気持ちですか？

(北島康介)

(少し笑いながら) もうアテネの時以上に気持ちいです。超気持ちいです。本当に。最高っすね。

(インタビュアー)

しかも世界新記録での金メダルとなりました。

(北島康介)

記録も優勝できたのでとても満足です。

(インタビュアー)

これで日本に勢いがつきましたよ、北島さんのおかげで。

(北島康介)

日本人ももっとこれから頑張ってくれると思うんで、僕もまだ 200 があるんで、頑張りたいです。

(インタビュアー)

最後にもう一度聞きます。今どんな気持ちですか？

(北島康介) チョー気持ちいです。

アテネ五輪の名言「チョーきもちいい！」を再現させるインタビューであったが視聴者の心に響いたのは、涙を拭いながら放った「何も言えねえ！」であった。この言葉は流行語大賞にノミネートされている。北島康介が生み出す「名言」とは、2度と再現されることのない、率直な心情の発露であり偶然の産物であることがうかがえる。2大会連2冠という大偉業を達成した北島康介はその後「強さを解剖」(8月14日ラテ欄)「強さの秘密」(8月15日ラテ欄)というテーマで報道され、「最後にかけての思い」「引退なのか」(8月18日ラテ欄)という引退を一つのテーマとして報道されることにより、報道量が長期にわたり維持されていた。

第2項 野村忠宏と谷亮子のケース

競技結果と反し報道量が少ないのが柔道男子60kg級の野村忠宏である。野村忠宏はアテネ五輪においてアジア初の五輪3連覇を成し遂げた。オリンピックのスケジュールでは男子60kg級と女子48kg級は同日に開催されており、野村忠宏(60kg)はすべての大会で谷亮子(48kg)と同日に試合を迎えており、翌日の一面はほとんどが、谷亮子の内容であった。

表 13 野村忠宏と谷亮子の戦績と紙面登場数の比較

野村忠宏	名前	谷亮子
アトランタ五輪優勝	オリンピック戦績	バルセロナ五輪2位
シドニー五輪優勝		アトランタ五輪2位
アテネ五輪優勝		シドニー五輪優勝
-		アテネ五輪優勝
-		北京五輪3位
優勝1回 3位1回	世界選手権戦績	優勝7回 3位1回
-	代名詞	やわらちゃん
598	紙面登場数(読売系列)	1345※
1994/10/16	紙面初回登場日	1991/7/19

表 14 2004年8月14日のスケジュール (アテネ五輪)

8月14日(土)			8月14日(土)		
柔道			競泳		
現地時間	日本時間	種目	現地時間	日本時間	種目
10:30	16:30	女子48kg級 予選	10:00	16:00	男子400m個人メドレー 予選
10:30	16:30	男子60kg級 予選	10:31	16:31	女子100mバタフライ 予選
16:30	22:30	女子48kg級 敗者復活戦 A	10:58	16:58	男子400m自由形 予選
16:30	22:30	女子48kg級 敗者復活戦 B	11:41	17:41	女子400m個人メドレー 予選
16:30	22:30	女子48kg級 準決勝 A	12:15	18:15	男子100m平泳ぎ 予選
16:30	22:30	女子48kg級 準決勝 B	12:42	18:42	女子4×100mリレー 予選
16:30	22:30	女子48kg級 3位決定戦 A	19:30	翌1:30	男子400m個人メドレー 決勝
16:30	22:30	女子48kg級 3位決定戦 B	19:39	翌1:39	女子100mバタフライ 準決勝
16:30	22:30	女子48kg級 決勝 谷亮子	19:51	翌1:51	男子400m自由形 決勝
16:30	22:30	女子48kg級 表彰式	19:59	翌1:59	男子400m個人メドレー 表彰式
16:30	22:30	男子60kg級 敗者復活戦 A	20:09	翌2:09	女子400m個人メドレー 決勝
16:30	22:30	男子60kg級 敗者復活戦 B	20:18	翌2:18	男子400m自由形 表彰式
16:30	22:30	男子60kg級 準決勝 A	20:28	翌2:28	男子100m平泳ぎ 準決勝 北島康介1位通過
16:30	22:30	男子60kg級 準決勝 B	20:38	翌2:38	女子400m個人メドレー 表彰式
16:30	22:30	男子60kg級 3位決定戦 A	20:48	翌2:48	女子4×100mリレー 決勝
16:30	22:30	男子60kg級 3位決定戦 B	20:56	翌2:56	女子4×100mリレー 表彰式
16:30	22:30	男子60kg級 決勝 野村忠宏			
16:30	22:30	男子60kg級 表彰式			

野村忠宏は谷亮子より、オリンピックで3連覇という偉業を達成しているのにも関わらず、谷亮子のほうが報道量が多かったのは上述の通りであるが、そこには同日開催種目であることが影響していると考えられる。野村忠宏と谷亮子は同時刻に同種目であるの柔道の決勝戦が行われていた。

シドニー五輪前には「最高でも金、最低でも金」、アテネ五輪前には「田村でも金、谷でも金」、北京五輪前には「ママでも金」という言葉が数多く使われており、多くメディア、視聴者が谷亮子のオリンピックの行方に興味を惹かれていた。

またアテネ五輪直前に怪我をしていたこと、夫である野球日本代表、佳知選手(31)(オリックス)が会場に応援に来ていたことも大きく報道された。佳知選手が身を乗り出して、「足、大丈夫か」と聞くと、谷亮子は両目をみるみる潤ませ、「大丈夫」と答え、夫婦の温かな光景が報道された。

谷は、試合後のインタビューで、「シドニーの時よりも何倍もうれしいです。」と声を詰まらせ、歓喜のインタビューに答え続けた。

谷亮子が試合を終えた直後畳に上がった野村の試合も優勢勝ちにより約10分後に終了。しかし、谷亮子のインタビューはまだ終わっていなかった。ミックスゾーンにおいて5分程待機した野村はインタビューを受けることを諦め控え室に戻ろうとしたところ気づいた記者から「野村さん今の気持ちはー?」と遠くから呼び止められる。野村は「最高!」とだけ叫んだ。3連覇を成し遂げた試合直後のインタビューは、歩きながらの「最高!」の一言に終わった。選手の試合直後の言葉とは何にも代え難い貴重なものであるにも関わらず、前人未達のオリンピック柔道3連覇を果たしたインタビューとしては短く、情報量の薄いものとなっていた。

谷亮子は「夫婦愛」「夫婦で金」という言葉が6回、野村忠宏は「妻も涙」などの言葉が2回記載されており、家族や夫婦愛に関する記載が多く見られた。

第3項 吉田沙保里と伊調馨のケース

北京五輪では吉田沙保里を伊調馨が報道量で上回っていたにもかかわらず、ロンドン五輪では吉田沙保里が上回るという逆転現象が起きていた。その理由を調査するため吉田沙保里、伊調馨における報道過程について以下に記述する。

・吉田沙保里

表 15 吉田沙保里選手の戦績と紙面登場数

名前	吉田沙保里
オリンピック戦績	アテネ五輪優勝
	北京五輪優勝
	ロンドン五輪優勝
世界選手権戦績	優勝10回
紙面登場数(読売系列)	768
紙面初回登場日	1999/3/10

吉田沙保里は、前人未達の世界大会13連覇を達成するなど、名実ともに世界の頂点に君臨する選手であり日本女子レスリング界を象徴する選手である。また、吉田沙保里の活躍は、レスリングだけでなく最近では、メディアの仕事でも活躍するようになった。

表 16 2012年12月 TV 出演ランキング

<http://www.tv-ranking.com/>より作成

順位	名前・職業	番組数	出演時間	11月	10月	9月
1位	松岡修造 (元テニス選手・タレント)	31	40時間20分	3位	3位	3位
2位	北澤豪 (元サッカー選手)	29	37時間50分	12位	9位	17位
3位	吉田沙保里 (レスリング選手)	17	36時間16分	50位	-	21位
4位	陣内貴美子 (元バドミントン選手)	18	35時間30分	1位	1位	1位
5位	武井壮 (元十種競技選手)	22	33時間57分	9位	8位	-

これは、2012年12月のTV出演時間ランキングである。吉田沙保里が3位にランクインしていることがわかる。吉田沙保里以外の多くの選手は松岡修造 (元テニス選手・タレント)、北澤豪 (元サッカー選手)、陣内貴美子 (元バドミントン選手) と既に引退している選手であるという結果となった。

吉田沙保里選手のTV出演数が伸びたのは、2011年以降であることがわかる。

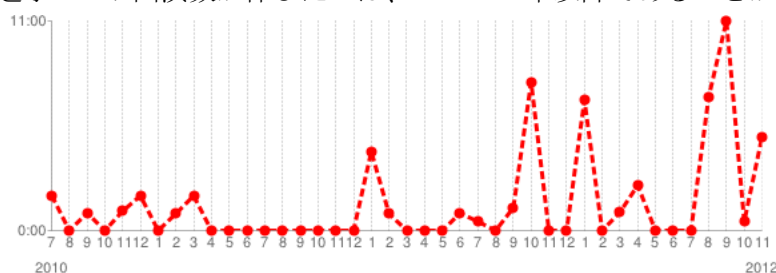


図 7 吉田沙保里選手、月別 TV 出演時間

<http://www.tv-ranking.com/>より作成

2010年のバラエティ番組出演はフジテレビの「ジャンク sports」のみであったが、2011年は10番組に出演している。それと同時にジャニーズタレントに恋をする「乙女、吉田沙保里」を多くのバラエティ番組が取り上げている。

・伊調馨

表 17 伊調姉妹の戦績と紙面登場数の比較

伊調千春	名前	伊調馨
アテネ五輪2位	オリンピック戦績	アテネ五輪優勝
北京五輪2位		北京五輪優勝
-		ロンドン五輪優勝
優勝3回	世界選手権戦績	優勝7回
312	紙面登場数(読売系列)	402
1999/10/27	紙面初回登場日	1999/10/27

伊調姉妹の妹である伊調馨はオリンピック3連覇の偉業だけでなく世界選手権優勝7回という日本を代表する選手の一人である。アテネ五輪では「伊調、姉妹で金へ」や「伊調姉妹の挑戦」など「姉妹」というテーマにおいて報道されている例が多く、「姉妹で金」を目指し切磋琢磨する姉妹愛がメディアによって報じられていた。

北京五輪においては、銀メダルに終わった姉千春のリベンジにかける妹として、「姉の雪辱伊調姉妹」、「姉は銀メダル、伊調馨執念の金で感涙」などのように報じられていた。そして北京五輪において伊調馨は連覇を達成する競技成績を残した。

しかし、北京五輪後に姉の伊調千春が引退し、姉妹としての報道量が減少し、結果的に

全体的な報道量の減少に繋がった。

第4項 松本薫のケース

金メダリストであってもオリンピック初出場の選手の多くは、報道量が山型で急速に減少してしまうのに対し、松本薫の報道量には持続性が見られた。この差異を分析するために松本薫に関する報道過程について以下に記述する。

松本薫はロンドン五輪金メダル1号として脚光を浴びた。お家芸である柔道で2日間不振が続いたこと、3連覇を期待された北島が敗北したこと、また松本が決勝を戦った同日、金メダルが期待されていた内村航平をはじめとする体操男子団体が銀メダルに終わったことなどを通じ、金メダルに対する期待感が一層増幅されている状況下での金メダルであったため、松本薫のロンドン五輪日本勢初の金メダルは強いインパクトを与える結果となった。

しかし、オリンピック後半になっても報道量を維持し続けたことから、ラテ欄記事を調査すると、「妖精見える松本」「不思議ちゃんに続け!」「不思議ちゃん伝説公開」など、キャラクター化された記載が多く見られた。

金メダル獲得直後のインタビューにおいて「今一番何がしたいですか?」の問いに「ピクパフェが食べたい」と話したことから、野性味溢れるプレイスタイルとのギャップやユニークなキャラクター性をテーマに報道される例が多く目立つ結果となった。

第5章 研究結果2

本章ではロンドンオリンピック出場者における競技成績と人気の関係性、さらにはカテゴリー分けしたA群、B群において人気に違いを生み出す要因として、どの因子に差異が存在するのかについて、アスリートエンドーサ効果の5因子を用いて統計的分析を行なった、以下はその結果について述べていく。

第1節 一番好きな選手ランキングと偉業ランキングについて

早稲田大学の学生を対象に行なったアンケートから一番好きな選手ランキングを作成し、上位15名を抽出した。さらに、その15名の選手において過去のオリンピック成績から「偉業ランク」を作成した。その結果、一番好きな選手ランキング1位には北島康介がランクインし、偉業ランキングも同様に1位という結果となった。次いで2位には内村航平が入り、こちらも同様に偉業ランキングは2位であった。一番好きな選手ランキング3位には室伏広治がランクインし偉業は6位という結果となった。それ以降は一番好きな選手ランキング4位に沢穂希となり偉業ランキングでは8位、好きな選手ランキング5位に吉田沙保里となり、偉業ランキング3位となった。詳細は以下に示す。

表 18 好きな選手ランキングと偉業ランク

名前	(項目6)5人で1番好き	偉業ランク
北島康介	1	1
内村航平	2	2
室伏広治	3	6
澤穂希	4	8
吉田沙保里	5	3
宮間あや	6	8
竹下佳江	7	14
木村沙織	8	14
太田雄貴	9	6
福原愛	9	12
川澄奈穂美	11	12
松本薫	11	11
伊調馨	13	3
入江陵介	13	5
石川佳純	13	8

第2節 A群とB群の分類について

第1節で抽出された15選手において、x軸を偉業ランク、y軸を一番好きな選手ランクとして散布図を作成し、散布図の近似曲線より高い選手と低い選手に分類し、それぞれをA群、B群と定義した。A群には北島康介、内村航平、室伏広治、沢穂希、吉田沙保里、宮間あや、竹下佳江、木村沙織、福原愛が、B群には太田雄貴、川澄奈穂美、松本薫、伊調馨、入江陵介、石川佳純が分類された。結果は以下の通りである。

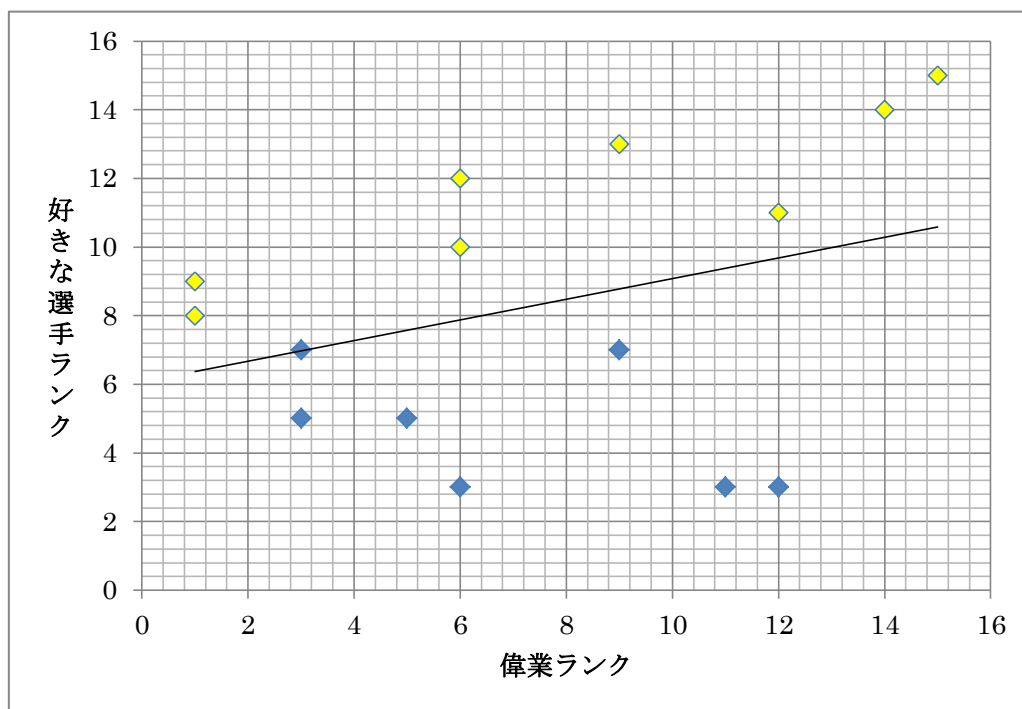


図 8 A群 B群分類方法

表 19 A 群 B 群分類表

A群一覧	B群一覧
北島康介	太田雄貴
内村航平	川澄奈穂美
室伏広治	松本薫
澤穂希	伊調馨
吉田沙保里	入江陵介
宮間あや	石川佳純
竹下佳江	
木村沙織	
福原愛	

第3節 A 群 B 群間に存在する差異に関する「好きな理由」の統計的分析

第2節で分類したA群、B群における差異を分析するために2節のアンケート調査内の項目5)をデータ化し、好きな選手の理由について客観的なカテゴリー分けを行い、その数のカウントを行なった。

A群に関しては全体的に概観すると、吉田沙保里の「競技の専門性」因子における「優れたスキル」という項目が61となり最も高い数値となった。次いで内村航平も同因子における同項目が58となった。また、沢穂希の「競技の専門性」因子における「リーダーシップ能力（競技も含む）」という項目で50という数値となった。

各個人で見ると、北島康介を好きな理由としては「プロとしての信頼性」因子における「言葉遣い（名言）」が最も高く、室伏広治では「競技の専門性」因子における「優れたスキル」という項目が最も高かった。以下にその詳細を表に示した。

A （上位3項目に色付け）

表 20 アンケート回答結果（A 群）

		北島康介	内村航平	室伏広治	澤穂希	吉田沙保里	宮間あや	竹下佳江	木村沙織	福原愛
競技の専門性	優れた競技スキル	24	58	12	8	61	13	12	13	5
	積極的なプレー(プレッシャーの中)	16	27	1	3	4	1	1	2	3
	協調性	2					2		1	
	リーダーシップ能力(競技も含む)	2	1		50		8	11	1	1
	目標志向(有言実行)	18	4	3						
社会的魅力	キャリアの全盛期	7								
	努力家	5	7	8	2	5		10	7	5
	多くのメディアが注目	3	3							10
	広く知られている	3		3	4	1			1	5
	身体的魅力(ルックス)		7	3					8	1
プロとしての信頼性	競技に適した身体	1		8		1				
	社交的									
	エネルギッシュ				1					
	責任感がある	5	1	2	2		1	1		1
	言葉づかい(名言)	43	1							
好ましいパーソナリティ	知的			2						
	堂々(マイペース)	5	20							
	ポジティブ	2					1			
	ライフスタイルに共感									
	道徳的(感謝の弁)		1							
キャラクタースタイル	フレンドリー									
	人生の歩み方に共感(年齢、挫折)	25		8	10			4		1
	素晴らしいスポーツマンシップ(挑戦)	3	1	3	4	2	3			
	振る舞いに共感(メディア対応)	2	1		3	1	2			
	思いやりのある(紳士の)		3	1			1			
好ましいパーソナリティ	謙虚			1		5				
	とてもチャarming(笑顔が可愛い)		2			1			4	4
	ユーモア	1	1			4			1	1
	魅力的	5	2	1	1	3				1
	誠実	1				1				
好ましいパーソナリティ	きさく(親しみやすさ)	1	4			7			1	6
	ファンとのつながりを維持する力	1							1	
	モラル	2		1						
	カリスマ性(感動や何かをやる期待感)	23	5	1	6					
	ファンと過ごす時間を持つ									
キャラクタースタイル	賛否両論ある									
	華やかさ	2	2	1						
	世界的に活躍(日本の誇り)	3	7	5	7	4				

B 群に関しては、川澄奈穂美の「社会的魅力」因子の身体的ルックスという項目において 20 という高い数値が見られ、次いで同選手における「競技の専門性」因子の「優れたスキル」という項目において 14 という高い数値であった。詳細は以下となっている。

B (上位 3 項目に色付け)

表 21 アンケート回答 (B 群)

		太田雄貴	川澄奈穂美	松本薫	伊調馨	入江陵介	石川佳純
競技の専門性	優れた競技スキル	8	14	3	4	6	9
	積極的なプレー(プレッシャーの中)	8	2	12			6
	協調性						
	リーダーシップ能力(競技も含む)	10					
	目標志向(有言実行)	1					
社会的魅力	キャリアの全盛期						
	努力家	1		1		3	5
	多くのメディアが注目					1	
	広く知られている						
	身体的魅力(ルックス)		20			7	8
プロとしての信頼性	競技に適した身体					1	
	社交的						
	エネルギッシュ						1
	責任感がある	1					
	言葉づかい(名言)						
好ましいパーソナリティ	知的						
	堂々(マイペース)						5
	ポジティブ	1		1			
	ライフスタイルに共感						
	道徳的(感謝の弁)						
好ましいパーソナリティ	フレンドリー						
	人生の歩み方に共感(年齢、挫折)	2					
	素晴らしいスポーツマンシップ(挑戦)	6					
	振る舞いに共感(メディア対応)	1	1				
	思いやりのある(紳士の)				2	2	
好ましいパーソナリティ	謙虚						
	とてもチャarming(笑顔が可愛い)	1	2			2	2
	ユーモア	6		2			1
	魅力的		1			1	
	誠実						
好ましいパーソナリティ	きさく(親しみやすさ)				1		2
	ファンとのつながりを維持する力						
	モラル						
	カリスマ性(感動や何かをやる期待感)					1	
	ファンと過ごす時間を持つ						
キャラクタースタイル	賛否両論ある						
	華やかさ		1				
世界的に活躍(日本の誇り)		1					

上記の A 群、B 群のデータを元に SPSS V13.0J for Windows を使用しノンパラメトリック検定である Mann-Whitney 検定を用いて比較分析を行なった。

以下の表より、マン・ホイットニーの U 検定を行った結果、「競技の専門性」因子において、「優れた競技スキル」、「努力家」(優れた競技スキル: U 値 10.0 Z=-2.007 P=0.0496, 努力家: U 値 8.0 Z=-2.266 P=0.0256)には有意差が認められた。(P<0.05)

(「競技の専門性」因子)

表 22 「競技の専門性」因子

	Mann-Whitney の U	Wilcoxon の W	Z	漸近有意確率 (両側)	正確有意確率 [2x(片側有意確率)]
優れた競技スキル	10.000	31.000	-2.007	0.045	0.0496
積極的なプレー (プレッシャーの中)	25.000	46.000	-0.237	0.813	0.8639
協調性	21.500	42.500	-0.834	0.404	0.5287
リーダーシップ能力 (競技も含む)	11.000	32.000	-1.996	0.046	0.0663
目標志向 (有言実行)	21.000	42.000	-0.907	0.364	0.5287
キャリアの全盛期	21.000	42.000	-1.195	0.232	0.5287
努力家	8.000	29.000	-2.266	0.023	0.0256

以下の表より、マン・ホイットニーの U 検定を行った結果、「社会的魅力」因子において、「広く知られている」(広く知られている: U 値 6.0 Z=-2.690 P=0.0120)には有意差が認められた。(P<0.05)

(「社会的魅力」因子)

表 23 「社会的魅力」因子

	Mann-Whitney の U	Wilcoxon の W	Z	漸近有意確率 (両側)	正確有意確率 [2x(片側有意確率)]
多くのメディアが注目	20.500	41.500	-0.798	0.425	0.4559
広く知られている	6.000	27.000	-2.690	0.007	0.0120
身体的魅力 (ルックス)	22.000	67.000	-0.640	0.522	0.6070
競技に適した身体	22.000	43.000	-0.761	0.447	0.6070
社交的	24.000	45.000	-0.816	0.414	0.7756
エネルギッシュ	26.500	47.500	-0.084	0.933	0.9546

以下の表より、マン・ホイットニーの U 検定を行った結果、「プロとしての信頼性」因子における、「責任感がある」、「人生の歩み方に共感 (年齢、挫折) (責任感がある : U 値 10.5 Z=-2.036 P=0.0496, 人生の歩み方に共感 (年齢、挫折) : U 値 10.0 Z=-2.073 P=0.0496) には有意差が認められた。(P<0.05)

(「プロとしての信用性」因子)

表 24 「プロとしての信用性」因子

	Mann-Whitney の U	Wilcoxon の W	Z	漸近有意確率 (両側)	正確有意確率 [2x(片側有意確率)]
責任感がある	10.500	31.500	-2.036	0.042	0.0496
言葉づかい (名言)	21.000	42.000	-1.195	0.232	0.5287
知的	24.000	45.000	-0.816	0.414	0.7756
堂々 (マイペース)	23.000	44.000	-0.502	0.616	0.6889
ポジティブ	26.000	47.000	-0.142	0.887	0.9546
ライフスタイルに共感	27.000	48.000	0.000	1.000	1.0000
道徳的 (感謝の弁)	24.000	45.000	-0.816	0.414	0.7756
フレンドリー	27.000	48.000	0.000	1.000	1.0000
人生の歩み方に共感 (年齢、挫折)	10.000	31.000	-2.073	0.038	0.0496
素晴らしいスポーツマンシップ (挑戦)	13.000	34.000	-1.746	0.081	0.1135
振る舞いに共感 (メディア対応)	17.000	38.000	-1.285	0.199	0.2721

「好ましいパーソナリティ」因子においてどの項目においても有意差は見られなかった。また、「キャラクタースタイル」因子においても全ての項目において有意差は見られなかったが、世界的活躍（日本の誇り）において正確有意確率が 0.0663 となり、有意差は見られないもののその他の項目に比べると認識は高い結果となった。

(「好ましいパーソナリティ」因子)

表 25 「好ましいパーソナリティ」因子

	Mann-WhitneyのU	WilcoxonのW	Z	漸近有意確率(両側)	正確有意確率 [2x(片側有意確率)]
思いやりのある(紳士的)	26.000	47.000	-0.133	0.894	0.9546
謙虚	21.000	42.000	-1.195	0.232	0.5287
とてもチャーミング(笑顔が可愛い)	25.500	70.500	-0.187	0.851	0.8639
ユーモア	26.500	71.500	-0.063	0.950	0.9546
魅力的	15.000	36.000	-1.478	0.140	0.1810
誠実	21.000	42.000	-1.198	0.231	0.5287
きさく(親しみやすさ)	19.000	40.000	-1.027	0.304	0.3884
ファンとのつながりを維持する力	21.000	42.000	-1.195	0.232	0.5287

(「キャラクタースタイル」因子)

表 26 キャラクタースタイル

	Mann-WhitneyのU	WilcoxonのW	Z	漸近有意確率(両側)	正確有意確率 [2x(片側有意確率)]
賛否両論ある	27.000	48.000	0.000	1.000	1.0000
華やかさ	21.000	42.000	-0.913	0.361	0.5287
世界的に活躍(日本の誇り)	11.000	32.000	-2.047	0.041	0.0663

第6章 考察

第1節 「言葉」と「ストーリー性」の重要性

北島康介の記事、インタビュー分析の結果、率直な気持ちが吐露される興奮冷めやらぬ試合直後のインタビューから得られる「言葉」やその選手の「物語性」や「ストーリー性」

が報道に大きく影響することが考察された。若年層におけるアンケートからも「努力家」「人生の歩み方に共感」に優位性が見られ、選手のストーリー性に視聴者は共感を求めているということがわかった。

また谷亮子の注目度が突出していた要因の1つとして、上述の「言葉」の存在もあると示唆された。

北島康介の名言が偶然の産物であったとすれば、谷亮子はメディアに自らを発進する上で自分自身がポークスマンの役割を担っていたと考えられる。「やわらちゃん」の愛称で注目されてきた日本柔道界を象徴するアイドル的存在である谷亮子が、オリンピック大会前に残したシドニー五輪での「最高でも金、最低でも金」、アテネ五輪での「田村でも金、谷でも金」、北京五輪での「ママでも金」という言葉に、人々はドラマ性を見出したのではないだろうか。シドニー五輪では期待されたアトランタ五輪で銀メダルに終わった悔しさから這い上がる過程を、アテネ五輪では結婚した一人の女性としての生き様を、北京五輪では出産した女性の強さとして多くの人の共感を得られたことが高い注目を生む要因になったと考えられる。

第2節 同日開催種目時における放送時間の「枠」と「タイミング」への意識の重要性

野村忠宏と谷亮子のケースでは同日に柔道決勝が行われおり、両者が金メダルを獲得したことにより、先に優勝を決めた谷亮子に報道陣が集中し、時間差で遅れて野村忠宏が優勝を決めた時点でもなお、谷亮子への取材が行われていた。このように、オリンピック3連覇という前人未到の偉業を達成したにも関わらず、谷亮子が多く報道される要因には同日開催種目であることが大きく影響していると考えられる。こういった報道を改善するためには放送時間の「枠」と「タイミング」への意識が極めて重要になってくると考察される。「複数のメダリストが同時に誕生した際、各選手の報道量が物理的にカバーされていること」が条件となり、多種目が同日に開催され、複数のメダリストが誕生するオリンピックの特殊性を鑑みると、選手、コーチ、開催大会側が一体となり意識を共有することが重要であると考えられる。

第3節 家族愛、夫婦愛、恩師との関係というテーマでの報道

「家族」というテーマがテレビにおいてニーズが高い裏付けとして3大会通じてラテ欄における家族に関する記載が目立った。

アテネ五輪においては、谷亮子は「夫婦愛」「夫婦で金」という言葉が6回、野村忠宏は「妻も涙」など2回、伊調馨は本名ではなくすべて「伊調姉妹」として語られていた。また上記以外のオリンピック選手の中では室伏広治の「父子親子鷹」「アジアの鉄人父を超え」など、家族に関する記述が計20回に上った。北京五輪においては、計7回であったが、ロンドン五輪では、金メダリストの数は北京五輪より少なかった一方、16回家族に関する記載が登場した。内村航平は「母も応援」など母に関する記載が2回、小原は「夫の支えで引退撤回」「夫が支え妻がとる金」など7回、村田は「妻の献身愛」など6回を数えた。このように、競技結果を残した選手を家族愛や夫婦愛と共に報道することは視聴者からの共感を生む報道に繋がるということが示唆された。

「家族」以外に見られた傾向として、「恩師との関係」で語られていたアテネ五輪谷本の「古賀コーチとの秘話」や、北島の「名伯楽平井コーチが語る」、ロンドン五輪村田の「恩師との約束」が見られた。このように、家族愛、夫婦愛以外にも恩師と関係や師弟関係という切り口による報道の仕方が共感を生む報道に寄与していることがわかった。

第4節 親近感のある選手への共感

20代前半の男女からは、「優れた競技スキル」「努力家」「広く知られている」「責任感がある」「人生の歩み方に共感」因子に、スポーツ選手を好きになる要因としての優位性が見られた。「優れた競技スキル」というの超人技を見たいというスポーツ特有の要因の他に、「努力家」、「責任感が強い」、「人生の歩み方に共感」因子にも優位性が見られたのは、勝利と同時に敗北にも対峙するスポーツ選手の生き様に、人生を重ね合わせるというドラマ性にも視聴者は共感を求めていると言える。

また「広く知られている」因子に有意性見られていることから、選手を好きになる要因としてその選手が醸し出す親近感が影響しているとも考えられる。「愛ちゃん」こと福原愛選手や「Qちゃん」こと高橋尚子選手など、あだ名がついた人気選手が多いのは、あだ名がついたことにより親近感を増幅させることで、人気選手へとつながっていった繋がっていったと言えるのではないだろうか。

第7章 総合考察

オリンピックにおいて、本来スターになってしかるべき選手が生まれる条件が明らかになった。

まず報道手法としては「複数のメダリストが同時に誕生した際、各選手の報道量が物理的にカバーされていること」が条件となる。多種目が同日に開催され、複数のメダリストが誕生するオリンピックの特殊性を鑑みると、選手、コーチ、競技団体が一体となり報道の「枠」、「タイミング」への意識を共有することが重要であると考えられる。例えば、試合後のインタビューが他の選手と重複しそうであるならば、コーチと選手で場内をビクトリーランさせるなど時間的差異を作るなどの対応を行う必要があると考えられる。

自戒の念を持ってアテネ五輪を振り返ると、谷亮子選手が連覇した時、自身の頭の中は谷選手が何を話すかでいっぱいであった。野村忠宏選手の3連覇という大偉業に敬意を払いつつも、目の前の勝者の情報を伝えることに最大の注意を払っていた。当時、大群となって谷亮子を囲んでいた報道局の中でのどこか1社でも、野村忠宏選手の3連覇を優先していたとすればこれほどまでに報道量に差がついたであろうか。谷選手は場内に応援に来ていた夫である野球日本代表の谷佳知選手と涙で言葉を交わし、その微笑ましい夫婦の姿をテレビは余すことなく放送した。さらに、もともとサービス精神旺盛な谷選手は丁寧にインタビューに答えたことで、野村忠宏選手の試合終了後まで谷選手のインタビューが続く形となった。もし仮に野村忠宏に十分が枠のインタビューが行われていたとしたら、3連覇という前人未到の偉業を成し遂げた直後に何を話したのか興味深い。その瞬間は二度と返ってこな来ることはなく、こういった状況を作り出してしまったことに対して反省の弁を述べたい。

しかし、金メダリストがスター選手になる条件を理解していれば、報道時間が重なる可能性が事前に分かったはずであり、柔道連盟やコーチとも連携を取るようにオリンピックの運営側をお願いをし、意図的に谷選手と野村選手との間に時差を設ける工夫ができたと考えられる。すなわち、野村忠宏選手の三連覇決定後、コーチとのミーティングを行って頂き、さらに、場内をゆっくりとビクトリーランして頂く。そうすることで谷選手のインタビューが終了した後に野村忠宏選手がミックスゾーンに到来するという段取りが可能となるように事前に準備できたはずである。野村選手は、シドニー五輪で連覇した後、アメリカ留学をし、一時は引退も囁かれた中、カムバックしたものの国内でも負け続けたストリーを持っていく。大学生になってようやく日本一になれた遅咲きの経歴など物語性に

溢れており、唯一、放送時間が重なるという点だけがネックであり、十分にスター選手となるにふさわしい条件を備えていると考えられる。テレビ報道の性格上、試合終了直後の映像がなければ、その後のハイライト映像で繰り返し放送し、視聴者と感動を共有することが困難である。そのためあらゆる手段を講じて、野村忠宏の率直な喜びを吐露する機会を作るべきであった。

吉田沙保里は2008年北京五輪において、連覇した直後のインタビューで既に「3連覇を目指します」と力強く話すなど、前人未到の強さがクローズアップされていた。しかし、特筆すべきは、報道量は伊調姉妹より少なかった点であると言える。吉田が現在ほどの存在感を示し始めたのは、実は2011年にバラエティ番組に出演し始めてからである。早稲田大学生に行ったアンケート調査でも「霊長類最強」という文言とともに「意外に乙女」「ギャップがある」などパーソナリティに好印象を持つ学生が多いことがわかり、「強いけれど乙女な吉田沙保里」というキャラクターを獲得し始めて、世間の耳目を広く集めるようになった。2008年の北京五輪の際に、もしこの研究を始めていたら、視聴者から「人生の歩み方への共感」を誘う、強さの裏に隠されたサイドストーリー取材に力を入れていたであろう。また、圧倒的な強さや、華々しく監督を肩車する姿だけではなく、視聴者が感じる「親近感」を引き出すインタビューをしようと思えることもできたかもしれない。また、選手をどのように伝えるかという報道内容に関しては、視聴者が選手に対し「人生に共感できること」「親近感がわくこと」を念頭に伝えることには意味があると言える。報道するのはアマチュアスポーツであり、視聴者にとって馴染みの薄い選手が多いことも事実である。一方でオリンピックはスポーツの中でも高視聴率コンテンツであることから、スポーツを日常的に見ているわけではない視聴者も多数いることが考えられる。つまりメディアとしては、家族愛や夫婦愛、恩師との関係やライバル関係など、普遍性を持たせた報道をすることに一定の意義があると考えられる。

「人生に共感できる」選手であることが伝わる手段として、選手が持つ「言葉」をインタビューで引き出す作業もメディアの役割と言えるだろう。また、それと同時に、吉田沙保里や松本薫のように、キャラクター化により報道量が増えていたことも、視聴者が感じる「親近感」を獲得していたことに起因していると思われる。

以前から、オリンピック報道を経験する中で、競技結果が明白に出るにもかかわらず、偉業達成選手全員が必ずしもスター選手になるわけではないことが疑問であった。メディアの影響力、特にオリンピックにおけるアマチュアスポーツの報道量を考えると、オリンピック報道が選手一人一人の市場価値に及ぼす影響ははかりしれない。だからこそ、「誰をどのように報道するのか」という論理的判断基準を持ってオリンピック報道に携わることが今後のメディアに求められていると考える。

第8章 結論

本研究は過去のオリンピック金メダリストがスター選手になった際の報道環境について明らかにしたものである

第1章では背景と目的を述べた。オリンピックとはアマチュアスポーツ最大の国際競技大会であり、2012年に開催されたロンドン五輪には、204の国と地域から約11000人が参加し、26競技302種目が行われた。オリンピックは世界の50億人が視聴すると言われており、日本国内でも五輪が開催される年にはアマチュアスポーツ報道量が格段に増える。また五輪関連番組は高視聴率を獲得することなどから、日本においてもオリンピック人気が高いことが伺える。

筆者はテレビ東京のアナウンサーとして、アテネ五輪、北京五輪、ロンドン五輪と3度にわたり現地で取材してきた。日本選手が華々しく活躍した3大会であったが、オリンピック報道に携わる中で、違和感を覚えたことがあった。それは競技結果とその後の知名度との間に差異が生じる選手がいたことである。勝敗や記録という明白な結果が出るスポーツ選手は競技結果に則した市場評価を受けてしかるべきであるが、必ずしも全員がそうではない現状が存在することに対し、メディア報道手法が何らかの影響を与えているのではないかという問題意識に至った。そこで本研究では、本来スターになってしかるべきオリンピック金メダリストがスター選手になるための報道内容と手法を明らかにすることを目的として論を進めた。

第2章、第3章では研究手法を述べた。手法1-1のラテ欄分析ではラテ欄(テレビ欄)上の名前登場回数を選手のテレビ報道量とし、各大会における金メダリストのラテ欄登場回数をカウントした。3大会の五輪開幕約1週間前～閉幕約1週間後までを調査期間とし、該当日の読売新聞の朝刊を、調査対象ラテ欄として調査した。各大会の「オリンピック前半戦総集編」と「オリンピック総集編」を除き、名前だけでなく該当する愛称(例:ヤワラちゃん)や総称(例:レスリング4人娘)もカウントし、金メダリストの各大会における報道量の推移と格差を分析した。

手法1-2の記事インタビュー分析では対象選手の中で報道量が他に比べて多い選手や、同種目で差異が生じている選手など特徴的な選手におけるラテ欄記事やインタビュー内容等の報道の変遷を追った。

手法2では若年層におけるロンドン五輪出場選手の中で好きな選手、またその理由を調査するために早稲田大学の学生702名を対象にアンケート調査を実施し、好きな理由を統計分析した。

第4章では、研究結果1を述べた。アテネ五輪では大会前から金メダル最有力候補として注目されていた北島康介選手の報道量が突出して多かった。一方、五輪3連覇の偉業を達成した野村忠宏選手の報道量は少なかった。北京五輪では2冠2連覇を達成した北島康介選手の報道量がアテネ五輪の山型から、引退報道も影響し五輪を通して報道量が持続する台形型に変化していた。ロンドン五輪では、内村航平選手の報道量が突出しており、アテネ五輪における北島康介選手に似た大きな山型を形成していた。次に吉田沙保里選手が多かったが、北京五輪においては伊調馨選手よりも報道量が低かったため、北京からロンドンにかけての上昇率が目立った。

記事、インタビュー分析から、北島康介のインタビュー時における言葉や、谷亮子のシドニー五輪での「最高でも金、最低でも金」、アテネ五輪での「田村でも金、谷でも金」、北京五輪での「ママでも金」という言葉が多くメディアに取り上げられていることがわかった。また、北島康介に対する「引退なのか」、「最後にかけての思い」や「姉の雪辱伊調姉妹」などの記事も多くメディアが取り上げていた。他には、谷亮子と野村忠宏の柔道決勝時刻が重なっており、谷のインタビュー時間が長時間に及んだ一方、野村のインタビュー時間が「最高」の一言で終わるものであったことがわかった。ラテ欄によく見られる記載事項の傾向としては、「家族」「ライバル」「恩師」が多かった。

第5章では研究結果の2を述べた。好きなスポーツ選手の理由における統計結果からは、「優れた競技スキル」「人生の歩み方に共感」「努力家」「広く知られている」「責任感がある」に優位性が見られた。

第6章では考察を述べた。ラテ欄研究からは、試合後のインタビューから得られる「言葉」やその選手の「物語性」や「ストーリー性」が報道に大きく影響することが考察された。若年層におけるアンケートからも「努力家」「人生の歩み方に共感」に優位性が見られ、

選手のストーリー性に視聴者は共感を求めているということがわかった。また、日常的に報道されているわけではないオリンピック選手の場合、普遍性を持たせて報道することには一定の意義があることが示唆され、「家族」「ライバル」「恩師」から『共感』を、また競技中とのギャップのあるパーソナリティ、つまり『親近感』を獲得することの重要性が考察された。アンケート結果からも「広く知られている」因子に有意性が見られたことから、その選手が醸し出す親近感が好まれる要因として存在しているということが同様に明らかになった。

さらには、同日に他種目が開催されるオリンピックにおいては、複数メダリストが誕生することを考慮し、報道時間の「枠」と「タイミング」に対する意識を、選手、コーチ、競技団体が一体となり高めていくことがメディア側に必要であると考察された。

第9章 参考文献

- 1) mith. G (1973)"The Sports Hero : An Endangered Species."
- 2) 鈴木守(2000)「スポーツ文化の現在」道と書院
- 3) 橋本純一 (2002)「現代メディアスポーツ論」世界思想社
- 4) 高橋利枝ら(2006)「グローバル・メディア・イベントとしてのスポーツ」順天堂大学スポーツ健康科学研究 第10号, 43~49
- 5) 鬼丸正明(2006)「スポーツ・映像・社会」
- 6) 深沢弘樹 (2009.2)「北京オリンピック報道における「物語」」経営情報学論集 第15号
- 7) フィスク、ハートレ (1991)「テレビを<読む>」未来社
- 8) 藤田真文(2006)「ギフト,再配達,テレビテキスト分析入門」せりか書房
- 9) Braunstein and Zhang(2005)"Athlete endorser effectiveness: model development and analysis"Emerald Group Publishing Limited
- 10) 読売新聞 2004年8月8日~9月6日、2008年8月4日~28日、2012年8月23日~9月20日
- 11) 毎日新聞 2004年8月8日~9月6日、2008年8月4日~28日、2012年8月23日~9月20日
- 12) 朝日新聞 2004年8月8日~9月6日、2008年8月4日~28日、2012年8月23日~9月20日
- 13) 日経新聞 2004年8月8日~9月6日、2008年8月4日~28日、2012年8月23日~9月20日
- 14) テレビ出演ランキング <http://www.tv-ranking.com/>
- 15) ビデオリサーチホームページ <http://www.videor.co.jp/index.htm>
- 16) 読売新聞縮小版 出版社：読売新聞社
- 17) ビデオリサーチ社過去の視聴率データ
(http://www.videor.co.jp/data/ratedata/program/oly_sum/2008_bei1.htm)
- 18) TV 出演ランキング (スポーツ部門)
(<http://www.tv-ranking.com/>)
- 19) JOC ホームページ
(<http://www.joc.or.jp/>)
- 20) 野村忠宏オフィシャルブログ
(<http://ameblo.jp/nomuratadahiro/>)

- 21)谷亮子オフィシャルサイト
(<http://www.taniryoko.jp/>)
- 22)北島康介オフィシャルサイト
(<http://www.kitajima-kosuke.com/>)
- 23)浜口京子オフィシャルブログ
(<http://ameblo.jp/hamaguchi-kyoko/>)
- 24)吉田沙保里オフィシャルブログ
(<http://ameblo.jp/yoshidasaori/>)

第10章 謝辞

本研究を行うにあたり、非常に多くの方々の協力やお力添えのおかげで完成させることができました。関わってくださった全ての方々に感謝の意を申し上げたいと思います。

執筆の際、指導教員である平田竹男教授の暖かくかつ厳しいご指導無くしては完成に至りませんでした。この一年間のご丁寧なご指導に対し深く感謝すると共にお礼を申し上げたいと思います。

同様に、違った視点から貴重な助言や示唆をいただいた副査の中村好男教授、友添秀則教授をはじめ、早稲田大学スポーツ科学研究科でご指導をくださった教授および講師の皆様がこの場をお借りしてお礼を申し上げます。

そして、平田研究室同期の三浦氏、大里氏、田中氏、青戸氏、土井氏、近藤氏、瀧本氏、西村氏にもいろいろと協力していただきました。同期の仲間にも心より感謝しています。

修士 2 年制の原氏、三澤氏、久保谷氏、山本氏、また博士課程の能智氏、政本氏にも多くの協力をいただきました。大変感謝しています。

どんなに感謝してもしきれません、皆様本当にありがとうございました。